

# 再築された前橋城

この絵図は、明治になって作成された再築後の前橋城です（縦72.5cm×横80cm）。現在も跡が残るのは、この再築された前橋城です。本丸は酒井氏時代に築かれた三の丸で、現在の県庁にあたります。二の丸は現在の群馬会館付近、三の丸は裁判所の付近です。絵図からは、失われた土塁や水堀の様子がうかがえますし、丸い馬出（城門を守るためその前に設ける土塁や石塁）もはっきりと分かります。

明和4年（1767）松平家の川越城移転以後、前橋町は徐々に衰退したため、前橋町民の藩主帰城を願う動きは寛政年間頃からありました。幕末になり、藩主松平直克は、内政を強化しようとする幕府政策と、藩主帰城による町の繁栄及び生糸貿易の利潤の増大を予測する前橋町民の期待を背景に、再築願いを幕府に出し、文久3年（1863）、前橋城再築が認められました。領内商人は、再築費用として7万7600両を出資しています。慶応2年（1866）本丸が落成しました。城全体の規模は15万7000坪余り、酒井家時代と同様土塁で築かれました。幕末らしく一部西洋の築城術も用いられています。工事は3年8ヶ月かかりましたが、工事を急いだため、櫓などは建てられず、門なども仮木戸で簡素なものでした。

〈参考資料〉『群馬県史』通史編4 716～718頁  
『前橋市史』第2巻 1115～1188頁

